

子連れ留学，子育て留学



鎌倉義士

私は2017年度に勤務校から派遣され、イギリス・バーミンガム市にある母校にて在外研修を行った。7年前の学生時代とは異なり、今回は息子と娘を連れて約1年の家族でのイギリス暮らしである。博士課程在籍時の7年間は妻が現地のカフェや日本人学校で働き、私の学業を支えてくれた。知人がまだ残り勝手知ったる土地とはいえ、7歳と2歳の子供を連れての生活は、夫婦二人だけの以前の暮らしとは異なった。

まず、ビザ申請で失敗した。Brexitの影響もあり、申請方法が以前取得した学生ビザより複雑になった。4月の出発予定が遅れ、息子は日本の小学校の入学式に急遽出席し、ひと月通っただけで1年生の級友とお別れすることになった。私は学内で会う学生と職員に出発延期の理由を繰り返し説明するのに疲れ果てた。

ようやく出発の目処がたったものの、次は息子の小学校探しで苦労した。住居を契約しなければ現地の小学校に出願できず、渡英の数か月前には契約を済ませた。イギリスでの4月は学年度の途中にあたり、市役所に相談をしても10校から受け入れ拒否のメールを受信した。日本とは異なり、公立校の生徒数に制限があり、定数以上は受け入れない慣習に驚いた。バーミンガムに到着し郵便ポストを見ると、近隣の小学校から欠員による入学許可の報告を手にして家族で喜んだ。

息子はイギリスに来る数年前から英語を学び、現地での生活準備をしていたが、現実とは異なり大変だった。学年度が半年異なるのはよく知られているが、さらにイギリスは5歳に小学校に入学する。日本で小学1年生の息子がイギリスではYear 3である。突然の英語による3年生の授業に息子はついていけず、当初は、授業中ひとりでタブレットを見るという寂しい思いをさせてしまい、留学を後悔したこともある。

イギリスの小学校はある年齢までは、保護者による送り迎えが必須となる。小学校の周りには、午前9時と午後3時に送迎の車で渋滞が起きる。帰宅後は息子と2人で学校の宿題に取り組んだ。毎日の朗読が英語の上達に役立った。そして、現地で公文式に通ったことで、算数は負けない自信を持った。英語ではフォニクスを学んだことで、意味は分からずとも読んで発音できるため、授業内の朗読に挙手するようになった。

対して、2歳の娘は気楽なものである。大学附属の保育園に通い、その教室を先生の名前である Jessy! と呼ぶまで大好きになった。頭が痛いのは保育料であり、大学スタッフとして値引きがあると聞いたが、週2日半で月約10万円は英語を学ぶ授業料込みだと納得するしかなかった。しかし、保育園でのクリームたっぷりの給食は娘の口には合わなかったようである。

家族でのイギリスでの暮らしを無駄だとは思わない。イギリスの小学校と幼稚園の様子を知ることができた。小学校の仮装による登校日のために、衣装を探しに街中を車を飛ばして走り回った。幼稚園では様々な国々からのパパ友やママ友と知り合い、子育て習慣の違いを学んだ。帰国後もイギリス生活の名残りは続く。英語学習における息子の強みはフォニクスを習得したことである。現在も初見の単語や文でも発音と音読は可能である。娘は帰国後もイギリスで購入したDVDを喜んで見ている。言葉の端々にも英単語が現れ、時に英語もしくは英語らしき言語で話している。7歳と2歳という臨界期前の英語圏での生活は、息子と娘にどのような影響を残すだろうか。彼らが成長し、このイギリスで暮らした経験を将来どう活かすのかは、親として研究者として楽しみである。

(かまくら よしひと・愛知大学准教授)